
とある植木の転生法則（リバイプロウ）

ティンク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある植木の転生法則^{リハイブロー}

【Nコード】

N6190Y

【作者名】

ティンク

【あらすじ】

転生した先は禁書目録の世界。

うえきの能力を使って川中植木はどう生き残るのか!?

始まりの法則

こんにちは。僕は川中植木。

僕はコンビニでジュースを買いに行ったはずなんだけど、なぜか白い空間にいた。

前の方には土下座している白いローブをきたおじいさんがいた。

……………コスプレ？

「ちがうわい！！」

「うわっ喋った！！」

「お主はワシを人形かなんかだと思っと思ったのか？
びっくりしただけ。」

「あなたは？」

「よくぞ聞いてくれた！！僕は神じゃ！！」

……………よし。

びぽぽ

プルルル

「警察呼ぶな！！神つてのは本当じゃぞ」

「仮に神だとしてその神が僕に何の用？」

「実はな、お主に転生してもらいたいのじゃー!」

転生っていうと……

「よく二次小説であるやつ?」

「おおそれぞれ」

いやな予感がしてきた。

「転生っていう事は僕が死んだって事?」

「そう」

「なんで死んだの?」

「僕の気まぐれ」

「(ああ………殺したい!!あのうすらハゲを殺したい!!)」

僕は生まれて初めて明確な殺意を覚えた。

「構わんじやる?どうせ天涯孤独じゃったし」

「それはそうだけど」

そう、僕の両親は2人とも孤児院出身で、元々親類などおらず、2人とも事故で死んでしまつて以来、僕は天涯孤独になり、1人で暮らしていたのだ。

「それにお主なら……おっとこれは言っちゃマズい」

「？」

なにかマズいことでもあるのかな？

「これからお主が転生してもらう世界は禁書目録インデックスの世界じゃ。知つとるかの？」

知らない。

「すみません知りません」

「ふむ、まあええわい。お主能力をつけてやるぞ」

それだったら漫画で僕と同じ名前の人が使ってた能力……

「うえきの法則の『ゴミと認識したモノ』を『木』にかえる能力、
リパース 回帰、神器をお願い」

「ふむ、おまけに『一秒』を『十秒』にかえる能力もくれてやろう」

「ありがとう！」

「じゃあ行っていい」

「え、ちょ……」

そこで僕の意識は途絶えた。

目が覚めると、知らない部屋にいて、僕はその部屋のベッドで眠っていた。

「……知らない……いややめとこつ」

なにかお決まりのような気がしたからね。

「……………？なんだこれ」

僕が起きて周りを探していると書き置きらしきものを見つけた。

『よう神じゃ。この手紙を読んどるといふ事は無事に転生できたよ
うだな。』

さてさっき言ったようにそこはインテックス禁書目録の世界じゃ。お主は柵川中学というところに明日から通う転校生という事にしておいたからの。今にいる部屋は自由に使ってもらって構わん。金は生活に困らない位はいれといてやる。
じゃあがんばれよ。』

「……………外に出てみるか」

ここにいるのも退屈なので外に出ることにした。

紹介の法則（前書き）

紹介です。

紹介の法則

川中植木

本作の主人公。

両親が死んで以来天涯孤独で、それを不憫に思った神様に転生の機会をもらい転生する。

一人称 僕

容姿 イケメンではないがそこそこカッコいい

性格 困っている人を見るとほっとけないタイプ。

1人であるのが好きだが、仲間とかがいやだという訳ではない。

能力

『ゴミと認識したモノ』を『木』にかえる能力

『一秒』を『十秒』にかえる能力

『リバース
回帰』

神器

一つ星神器

クロガネ
鉄

二つ星神器

フード
威風堂堂

三つ星神器

ランマ
快刀乱麻

四つ星神器

マッシュユ
唯我独尊

五つ星神器
百鬼夜行ヒツク

六つ星神器
電光石火ライカ

七つ星神器
旅人ガリバー

八つ星神器
浪花なみはな

九つ星神器
花鳥風月サイク

十つ星神器
魔王まほう

出会いの法則

外でふらつくことにした僕は、とりあえずごはんを食べる事にした。

「やめてください!!」

「?」

僕が歩いていると、数人の男たちが女子中学生に絡んでいる(多分ナンパ?) 光景が映った。

「とっ!!」

僕は電光石火ライカで走り出し……
シュバ!!

「逃げるよ」

「!?!」

その少女を掴み、遠くへ走り去った。

「キヤアアアアア!!」

「()ポカーン………」

ふう…

ここまでくれば大丈夫だろ。

「大丈夫だった？」

「キュウウウウウ…」

あ…

気絶してら。

「僕は川中植木、植木って呼んでよ」

「あたしは佐天涙子、よろしくね植木君」

僕と佐天さんは今近くのファミレスで昼ご飯を食べていた。

「植木くん能力者だったの？」

「なに？その能力者って」

「え……………まさか能力を知らないの？」

植木は原作知識のない転生者です。

「知らないよ」

僕が知らないと答えると佐天さんは……………

「……………プツ、アハハハハ！！！！まさか能力を知らないなんて、アハハハハ……………ひー、おなか痛い！アハハハハ！！！！」

笑った。

しかも大爆笑。

佐天さん、ここはファミレスですよ、少しは自重してくださいね。

「知らない事がそんなおかしいの？」

「常識よ、ふつう誰でも知ってるわ。少なくともこの『学園都市』ではね」

……なるほど大体読めてきたぞ。

僕がいまいるところは学園都市というところで、そこでは能力を使える人がたくさんいるという事だな。

「佐天さんもその能力者なの？」

「いや、あたしは無能力者（LEVEL0）よ」

「そっか、実は僕転校生でさ。今日ここにきたばっかなんだ」

「こんな時に？珍しいわね」

「僕もそう思うよ」

「あつこの特大クリームパフェーつくください」

「かしこまりました」

「…まだ食べるの？もう8杯めだよ？」

「甘いものは別腹よ」

「さいですか…」

ファミレスの料金は全部僕が払った。

佐天さんが「悪いよ、助けてもらっただのに」と言ったが僕がレシートを奪って料金を払い逃げたからだ。

佐天さんから逃げ切った僕は夜、河川敷で能力の練習をしていた。

「唯我独尊、百鬼夜行っ！！」

僕が放った唯我独尊は百鬼夜行にぶつかって消えた。（もちろんわざと）

「よしきちんと出せてるぞ。次は花鳥風月！！」

僕が飛行神器の花鳥風月を発動すると、僕の背中に黄緑色の翼が生えた。

「GO！！」

僕は黄緑色の翼を羽ばたかせて真上に飛んだ。

「……すごいなこれ」

始めて空を飛べた事に感激した僕は、人目についてもいけないと思いい家に帰って寝た。

天界

「植木のヤツ元気でやっとなるかの……ワシからのプレゼントじゃ、
ありがたく受け取るがよい」

神は一つのモップを取り出すと、箒を下界に向かって投げた。

転校の法則（前書き）

どうしても短くなってしまっ…

転校の法則

チチチチチ……………

朝。

僕は外に出て、ランニングを始める。

毎日の日課であったランニングは、今日に限ってはここら辺の地理を把握する、という目的もあった。

「ホッホッ」

規則的なリズムを刻んで走り続ける。

「待ちな兄ちゃん」

そして…

「ちょっと金かしてくれねえ？」

ゾロゾロ

……………これもいつもの事だった。

まさか転生してまでカツアゲされようとは。

まあ情けない顔してるからね。

「僕今お金持ってないよ」

「……………まあ、これは本当。そもそもランニングする時に財布は普通持たない。
落としてしまったら困るしね。」

「へっ、だったら憂さ晴らしにテメエを殴らせてもらっぜ」

「はあ…またいつもの展開か。」

「いいよ。できるもんなら……………ねっ!」

僕はポケットに入ってたレシートを握りしめ、地面に手をついた。

「……………なんだ、驚かすなよ…」

ポコポコ

「……………?」

「ふんっ!」

「ガハア!!」

木となったレシートは地面を通り、不良を下から突き上げた。木は不良の顎にモロにヒットし、不良は気絶した。

「な…こいつ能力者か?!」

「かなうわけねえ…」

「チツ、どきなお前ら、俺がやってやるよ」

1人の男が奥から出てきた。

多分この人がリーダーだろう。

「はあ!!」

「!?!」

ドカーン!!

ポオオ……

「……………火？」

「はっはっはどうだ『パイロキネシスト発火能力者』レベル3の火の味は！！わかつたらおとなしく殴られ『ピック五つ星神器』百鬼夜行』！！』あべし！！』

『ピック百鬼夜行』は一点への攻撃力なら『マッシュ唯我独尊』をも凌ぐ『ピック突き』の神器だ。

当然リーダーは吹っ飛び、壁に叩きつけられる。

「リーダー！？」

「ま、いいか。考えるのめんどくさいし。で……………まだやるかい？」

僕がそう言って脅すと、不良達は一目散に逃げていった。

リーダーを忘れていたので

「忘れ物だよー！！」

『なみはな波花』を使ってリーダーを掴んで、逃げていく不良達に叩きつけた。

「ギャアアアアアア！！！！」

「それでは転校生を紹介します」

しばらくして僕は転校生として学校に行き、先生と一緒に教室に向かい、呼ばれるまで扉の前で待っていた。

「入ってきて」

ガララ

「川中植木です、趣味は走る事と公園掃除です。よろしくお願いします」

僕は教室に入り、自己紹介した。

すると誰か女子生徒が急に立ち上がった。当然クラス全員の視線は彼女に集まる。

「う………植木君!？」

え…

「さ、佐天さん?!」

そこにいたのは、昨日ナンパから助け、一緒に昼ご飯を食べた佐天さん、その人だった。

その時僕の両の手のひらになにやら紋のようなものがあつたのだが、僕はまだそれを知らなかった。

続く

天界

「植木よ…まだその紋に気づいておらぬのか…早く習得するがいい、

『モツプ』に『^{ガチ}?』を加える『^{シヨブのつりよく}職能力』を……………」

神様の言葉を聞いていた者はいなかった。

転校の法則（後書き）

えーと

植木君の職能力ですが、

「第で飛だと花鳥風月が意味なくなる」と弟から指摘があったので、原作通り「モップ」に「ガチ？」を加える能力にしたいと思います。意見をくれた方々、すみませんでした。

強盗の法則

「う、植木君!？」

「さ…佐天さん!？」

…まさか佐天さんがいたとは…世間って狭いな…ホント。

「…知り合い？」

「ま、一応…」

「じゃあ佐天さんの隣が空いてるからそこに座ってくれろ?」

「わかりました」

テクテク…

ガチャ。

「…………やあ」

「…………うん」

なんか、気まずい……

「今日はシステムスキャン身体検査です、各自で能力を測定したら帰宅してよろしい」

「…………システムスキャン?」

「川中君は先生と一緒に来てください」

「あ、はい」

「はい、じゃあここに座って」

「はい」

僕が連れてこられたのは、なにやら無機質な部屋。

その部屋には、コードがたくさん伸びている椅子があった。

「では、始めます」

僕の頭に電極がつけられる。

その瞬間、僕の頭に激痛がはしった。

「いったあああああああああああ！？」

「！？」

その痛みに耐えきれず僕は電極を外し逃げた。

「あ、ちよまだ終わってない！！」

先生の言葉は僕には届かなかった。

「なんで逃げちゃうんですか？能力つかえたかもしれないのに」

あのあと逃げてしまった僕はLEVEL0と診断された。

それにしてもすごく痛かった…

あれに耐えられるなんてすごいみんな。

「まああたしもLEVEL0だし。気にしない気にしない」

あの後初春さんが

「今日白井さんに頼んで常盤台の超電磁砲レーザーガンに会わせてもらえるんで一緒に行きましょう」

と言ったので僕達は集合場所に向かって歩いていった。

「ふああ……」

「初春寝不足？」

「いや……今日早朝に風紀委員ジャッジメントの仕事があったもので……」

「大丈夫初春さん？」

「はい……にしても変でしたね……」

なにかその仕事で変なところでもあったのだろうか。

「変ってなにが？」

「朝に能力者同士があらそっていると通報がきたので出勤したのですが……どんな能力者かわからなかったんです。駆けつけた時にはす

でに終わっていて…そこにあっただのは……」

「あっただのは？」

「一本の木だけでした」

「……………木？」

「(……………100%僕だ)」

そっだ…木を片付けるのを忘れてたよ。

「バンクで調べても木を使う能力者なんて見つからなかったのでも
すます謎だなんて……」

「謎といえばさ、昨日黄緑色の光が空に昇ったの見た？」

「見ました！！あれも謎ですよね」

「(うんそれも僕だ)」

花鳥風月セイウキを見られてたか…これからはあまり使わないようにしよう。

集合場所のファミレスについたので、扉に向かおうとした。

なんとなく窓を除くと…

抱き合ってる女子中学生が2人いた。

「……………」。

「ほえ〜……………」

「……………は？」

佐天さんと初春さんは顔を赤らめ、僕は目が点になっていた。

「クレープ食べましょよ」
「」

あの後お互い自己紹介し、全員でクレープ屋さんに並んでいた。

どうやら超電磁砲こと御坂さんはおまけのゲコ太なるもの目当てのようだ。

本人は否定していたが、顔を赤くしていたのでバレバレだった。

実際御坂さんのところでおまけがなくなって佐天さんがゲコ太をあげたら滅茶苦茶喜んでたし。

「しかしさ、御坂さんてお嬢様って感じしないよね」「」

「激しく同意」

「そうですよね…」

「ところでさ、あの銀行なんでシャッターしまってたんだろうね」

「そりゃあアレでしょ、銀行強盗とか…」

ドオオオオオオオオオオオン！！

「まじ？」

「初春、アンチスキル警備員に連絡ですの！！」

そういつて飛び出した人は白井黒子さん、さっき御坂さんにだきついていたツインテールの人だ。ジャッジメント
どうやら初春さんと同じ風紀委員らしい。

あ、白井さんが銀行強盗犯をなぎ倒していく。すごいな、合気道かな？

ん？あの能力は・・・

思い出した。

昨日なぎ倒した人と同じ『バイロキネシスト発火能力者』だ。

「『ゴミ』を『木』に変える能力!!」

「あべし!!」

「『!!?!?』」

僕は持っていたクレープの包み紙を木にかえて、その木で『バイロキ発火能力者』を思い切り殴った。

「…ふう」

「植木君、無能力者（LEVELO）じゃなかったんですか!?!」

「その話はあと」

「ダメー!!」

「?!?」

佐天さんの方を向くと、佐天さんが一人の男の子を守ろうと強盗犯の一人と争っていた。

「佐天さん!!」

その時、僕の手のひらが突然光る!!

「?!?」

僕が手のひらを見ると、「うえきの法則+」に出てくる「モップ」の絵が右手に、「?^{ガ手}」の字が左手にあった。

「うおおおおおおお!!モップヘッドバットオオオオオ!!」

僕は右手からモップを召喚し、モップの毛を顔の形にし、強盗犯を

殴った。

「ぐっ……」

よろめいた強盗犯は、車にのって突撃してきた。

「…もう頭にきた」

僕は車の進行方向に立ちふさがる。

「危ない!!」

「うおおおおおおお!!!!」
『鉄』クロガネ ええええええええ!!!!」

僕は『鉄』クロガネを向かってくる車にぶっ放した。

続く

強盗の法則（後書き）

うまく文が書けない……………

植木の法則1（前書き）

番外編。

作者が植木君に質問します。

植木の法則 1

質問 1

好きな食べ物を教えてください

『うーん…ラーメンかな。後はもんじゃ焼きとか』

質問 2

好きな飲み物を教えてください

『水だね。シンプルイズベスト!!』

質問 3

趣味はなんですか

『走る事と公園掃除。昔うえきの法則の主人公を真似してたら意外と面白くてさ。ハマっちゃったよ』

質問 4

得意な科目を教えてください

『国語と体育だね。』

質問 5

好きな人はいますか

『うーん…今のところは………』

質問 6

あなたの血は何色ですか

『赤だよ?! 僕人間だから!!』

質問 7

神に誓えますか

『あんな神に誓いたくないよ!!』

質問 8

スリーサイズは？

『僕男なんだけど』

質問 9

佐天と初めて会った時の印象は？

『かわいい子だなーくらいだったかな』

質問 10

初春と初めて会った時の印象は？

『……お花畑？』

質問 11

黒子と初めて会った時の印象は？

『思考が軽く停止したよ』

質問 12

御琴に初めて会った時の印象は？

『上に同じく』

質問 13

好みのタイプは？

『そうゆうのあんなないけど…強いて言えば話しやすい子かな』

質問 14

転生させてもらってよかったと思う？

『…まだわかんない』

質問 15

自分の能力についてどう思う？

『……軽くチートかも』

質問 16

一番好きな言葉は？

『ボーイズビージャステイス!!』『青年よ正義を抱け』!!』

質問 17

キメゼリフとかある？

『うーん…考え中』

質問 18

彼女欲しい？

『いるに越したことはないけどいなくてもいい』

質問 19

最後の質問。これから植木君は…『どうする』？

『決まってるさ…』『自分の正義を貫き通す』!!』

超電磁砲の法則

「いくわよ植木!!はっ!!」

「『威風堂堂』!!」

御坂さんが放った電撃を『威風堂堂』で防ぐ。

『威風堂堂』は鉄甲がついた腕で自分の身を守る二つ星神器だ。
攻撃に使えない訳でもないが)

「やるわね。じゃあこれなんかどうかしら?」

御坂さんがそう言うと、地面から黒い無数の粉がザワザワと集まり、
剣へと姿を変えた。

「これは砂鉄よ。粒一つ一つがチェーンソーのように振動してるか
ら当たったらちよーと血が出るかもねっ!!」

「絶対ちよつとじゃすまないでしょ!!」

僕のツッコミを完全に無視し、御坂さんはその剣を容赦なく振り下ろす。

「うわっ!!」

御坂さんの剣をよけ、一度距離をとる。

そっちが剣なら…

こっちも剣だ!!

「三つ星神器『快刀乱麻』!!」

自重?しないよ。だって命の危機だし。

まあそれはともかく、僕が発動した『快刀乱麻』を見て御坂さんは、

「な……………何よそのバカでかい剣は!!」

滅茶苦茶驚いていた。

僕の神器は『ゴミと認識したもの』を『木』にかえる能力と組み合わせる事で、さらにその力を引き出す事が出来る。その証拠に、今僕が呼び出した『快刀乱麻』の長さは軽く5mを越えている。

「やあ!!」

僕が『快刀乱麻』を御坂さんのすぐ横に振り下ろすと、地面がえぐれ、川の水が一瞬切れる。

「な……………!!」

御坂さんは困惑する。

僕は『快刀乱麻』を消して、困惑している御坂さんに次の手を繰り出す。

「モップ!!」

「!!」

御坂さんは間一髪でよける。

まだモップの使い方に慣れてないからこれはしょうがないと思った。

御坂さんは態勢を整えて、一枚のコインを取り出す。

「喰らいなさい、超電磁砲!!」

「!?!」

『威風堂堂』や『電光石火』をしている暇はない!!

だったら……

上だああ!!

「『花鳥風月』!!」

ドオオオオオン!!

「じゃあね！」

逃げる事を決意した。

「『電光石火』！！」

「え、ちよつと植木君！？」

佐天さんの呼び掛けを無視し、僕は時速150kmで去った。

はずなのに。

「あんた私と勝負しなさい」

夜歩いていきなり現れたのは、常盤台の電撃姫こと御坂御琴さんだった。

「どうして場所がわかったの？」

「ああ、それ？あたしって常に微弱な電気を流してて、それがレーダーの役割をしてくれるのよ」

すごいなそれ。

「で、戦うって話だけ？いいよ別に。ただ人のいない場所だね」

別に断る理由もないのでその申し出を受け、河川敷へ移動した。

ここで冒頭に戻る。

さて『花鳥風月』^{セイクー}で超電磁砲^{レールガン}を回避した僕は、ただ意味もなく空中に少し浮いていた。

使わないようにしようって決めてたのにな。

下を見ると御坂さんは僕が消えたように見えたとようで、キョロキョロしていた。僕は御坂さんのところへ降り立つ。

「僕はここだよ」

「な…あんなによその翼!!」

「とにかく、僕の勝ちでいい？」

「…まああたしも電池切れで動けないからね。あんたの勝ち」

どうやらさっきの攻撃で全て電気を使ってしまったみたいだ。

「ところであなたの能力をいい加減説明しなさいよ」

僕は説明した。転生者という事は隠し、神器、能力、また能力は学園都市の能力とは全くの別物だと言うことを。

「…まあ植木が実際使ってるんだから信じるしかないわね」

「じゃあ寮まで送っていくよ、電池切れで動けないんでしょ？」

「じゃあそつとせてもらおうわ」

「よし」

僕は御坂さんを抱きかかえる。

「なっ！！」

御坂さんの顔が赤くなっているが、僕はそれを無視し、『セイクリ花鳥風月』で飛び立った。

UNU

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6190y/>

とある植木の転生法則（リバイプロウ）

2011年11月21日22時52分発行